「またゲシュタポなのか？」

公開書簡・ベルリン、2002 年 1 月 27 日

2002 年 1 月 25 日金曜日、最も混み合う時間帯に、7 人の人物がダークセン通り 40 番地のタイ料理店「トゥアンス・ヒュッテ」の、満席の 38 平方メートルの客席と厨房に入ってきて、当惑する客の目の前で従業員の検査を始めた。そのうち 4 人は、急いで駆けつけた店主に対し、南西職業安定所の職員だと名乗った。一人は、1998 年の聖金曜日の夜にファザーネン広場で行われた手入れの際の女性職員に似ていた。彼女は身分証の提示を拒んだ。手入れは午後 11 時少し前に終わった。多くの客が動揺して帰っていった。あるスイス人の客が私に尋ねた。「またゲシュタポなのか？」　ほかの客たちは手助けを申し出てくれた……。

1995 年以来、特別捜査班は私のタイ料理店をおよそ 40 回にわたって手入れし、1998 年だけでも 12 回に及んだが、実質的な成果は何もなかった。匿名の密告があるたびに、また国が命じる不法就労撲滅の大規模作戦があるたびに、国家はレストランに向けて動員する口実を得る。私のタイ人料理人で、到着後 4 週間以上ドイツにいて警察署の中を見たことのない者はほとんどいない。トゥアンス・ヒュッテの手入れの直後には、2 人がバス停で警察に逮捕された。

あの晩、ドイツでどれほど多くの職員が、無力で怯えた、しばしば外国人である飲食業の厨房労働者たちに襲いかかったことだろう。彼らは来る日も来る日も価値連鎖の最底辺に立ち、そのつましい暮らしによって、ドイツ人の皿の上のステーキがまだ 100 マルクもしないようにしているのだ。神聖なドイツの週末というオアシスも、14 か月分の給与を受け取る公務員の安定した生活も、50 歳で引退できる教師のような機会もないままに。

「自動車宰相」は、絶え間ない補助金によって、大企業がドイツの国家官僚制の鉛のような重圧の下でも存続できるようにしている。飲食業には、国家から強まる圧力を逃れる術がない。脱税者や株式市場を荒らし回る資本とは違い、思いのままに移転する自由がないのだ。銀行はいずれにせよ、鹿のように臆病なふりをして、飲食業に対して国家と同じように振る舞う。高額な弁護

士でさえ、「飲食店主という市民」を国家から守ることはほとんどできない。

地域のヨーロッパにおいて、連邦の一労働官僚が国内で絶対的な権力を握り、いまやボンから単独で、ドイツにおける専門料理人のあらゆる就労許可を与えたり拒んだりできるというのは合法なのか。ベルリンの地方職業安定所は、ベルリンでいつ代わりのタイ人料理人を雇えるかを決めるだけの書類係に成り下がり、同時にタイ王国に対して、誰が、何がタイ人料理人であるかを説教しているのか。連邦労働官僚が次々と新しい手続きを生み出し、苦境にある中小企業に無意味な費用を絶えず負わせることは許されるのか。例えば、2000 年 1 月から、ボンが選んで現地に住むドイツ人の公認料理人に、バンコクでの料理人試験のために支払わねばならない 800 マルクのように。営業の最も忙しい時間帯の無神経な検査が、対象のレストランに経済的損害を与えることは、本当に許されるのか。

政府に次いで、レストランはおそらくベルリン最大の雇用主である。レストランには、中世ヨーロッパのユダヤ人のように、国家官僚制の単なるスケープゴートや金づるに貶められることなく、普通に存在する権利がある。その人々の名前の一部は、ベルリンの歩道に刻まれているのを見つけることができるだろう。

1969 年、ニューヨークのストーンウォールの人々は警察の手入れに抵抗し始めた。顔を上げよう、抵抗しよう。今こそその時だ！　これらすべてに苦しむ普通の人々を犯罪者に仕立て上げるような状況であるならば、社会はその状況を変えるべきである。

非難される闇労働の原因は、ドイツのあらゆるものにのしかかる国家の重い負担にある。それは、耐え難い官僚国家のスリム化も含めて、軽減されなければならない。

犯罪者は不誠実な国家であって、普通の人々ではない。私は政治家に対し、飲食業がその経済的・社会的役割にふさわしい基本的な敬意を受けられるよう求める。

ドイツの労働法、税法、移民法は、低賃金と外国人労働者の高い割合を特徴とする飲食業の現実を反映するように作られなければならない。

ノルベルト・H・G・フランケンシュタイン　ベルリン、2002 年 1 月 27 日
マオタイ・レストラン経営者

原資料の翻訳